書翰書式帖

特258
517

始

特258
517

松本直書

書翰書式帖

東京　峯文荘發行

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

明
けましておめでたう
ございます さいさきよきは
ない御一家のみなさまには
清栄にこなることとしたい
ぞんじ申上ます
時局中ハ一方ならね
御力添にあづかりまして
ありがたくぞんじ 一同喜
びにおもいまするところ
ことしも皇軍の意
筆をもって國難にも
邁進いたすことをいのり

御力添にあづかりまして
おかげさまにて一同無事
すごしおりますれば
ことしも皇軍の為
筆をもって國難にも
邁進いたすことをちかひ
つゝしんで御挨拶
申しあげまいらせ
かしこ

昭和十四年元旦

東山明子

西野晴子様

時候もにぎにぎしく
ますますいよいよお揃様で
近頃はなかなかおもしろい遊
をいたし申まして
まくお帰りとなつやふ
ゆを済ましとめして
はいしましふけまあり
御高祝様の法様嬉も
いよいよと中途なく存して（さわまさ）
あれうまうの悲だらさ時
おもつゝまつゝたわし
けいを私たあづりまして
遊ましたのをお帰り

いつも申訳なく存して
さわりまで
あれこれの患だらき時
おきづしこまつたわたし
けいをれたたあづりまそて
並まりしたのをお詫り
の時こいちゃくたた差あさ
せつとどつり考てく少
しも思ひぢきじ々すこ
あそやつと筆づつまかり
まつるみで急ぐこ法とう
中上げもせ下あて
失礼おゆるしのほど
ねがひあげます
御妹様へづつこ
よろしく
たのむへ申しあせ

一月七日　美代子

の時にはやく御送申さ
せつとかう存てく少
しも思ひまかせず候に
あそてやつと筆がつまかり
まつるみで甚ぐにはとら
申上げまゐらせ一寸まで
先程おゆるしの
ほど
ねがひあげます
御妹様がたに
よろしく
お傳へ下さいませ
一月七日 美代子
ふぢ子様
はゝもに

わざ〳〵御使で時計を
おとゞけ下されありがたう
ござりました
御言葉にあまへて為勢
ちやうだいいたし御おく
りあでいたゞき此方から
こゝに御礼を申上げまゐらせ
餘りの面白さよろこんで
うちも話に夢中になり
時計の事もまぎれて
ありゆしお手数を
かゝおまへにしよせん
先ハ 御礼のミ
あらく

りおでいくつまく此方から
こゝ御礼を申上げまゐらせ
余りの面白さよ過ぎて
うちも話に夢中になり
時計の事もまきわすれて
まりゆしるにお手数を
かゝおそくによせん
先は御礼のみ
あらく

一月七日　ふぢ子

美代子様
御もとに

前方に供も申候よ
なつかしきおひめさま
のね あねさま 法様樋
ならば 松ぞ弟さまと
出雲にゆかりして思ひ
かけまで 清水堂のそ
ざれ 桜のそうらを見て
参りよしよの出実く
ござりまする 彼岸桜でい
あいのでまうけして
嬉しくて 弟と一緒に
大声でく 唱歌をつつ
つてみたいやうな気
まなかり一四した

大[illegible]く[illegible]
つてみたいやうな気
になりました
最一度あそこを御一緒に
行つてみたいのですが
明日の晩頃は　ご都合の
はいかゞ　ちうのあまれよきん

御手すきに
お伴させて
いたゞきたし

四月三日
京子

みや子様
御もとに

上野の初花をはなしに
なさるさうでございますは　私の
うちの桜もありますが
はなみがかはいいのでございます
むかふの彼岸桜はもう
ちつてしまひましたら
一重の山桜も咲いてゐるで
あらうと
思つてをりまする
私
年よりを母に願ひますから
許されましたならば
明日はそれでお友だちの
お茶の会でわたくしも
楽しく
はるのさくらまちぶ
ちようでまゐら

[illegible]毎[illegible]ふら

許されよしたく存じ候ど
明日はそれぞれのお友だちの
お茶の会でわるくも
東らしく
ゆうきよ一日まうしあげ
さうで
かしこ

明日よ
いよしう一日きう
きうと
よかり一日に

三日
こや子

京子様
御もとに

先程は思ひがけぬ御留守に
おしかけながらお邪魔を
相待いたしてをりましたれど
をはりから学校のおかへりの
御嬢様のお許しなく
たいそれながらお菓子まで
お勧めしらせいかゞかと何
ともありがたくぞんじまゐらせ候
御ちそうさまになりしのよし
菓子甘えすぎのそれ餘りに
あつかましいとも存じ
なほまた折角のお優しい
御厚志をむげにしては
かへつてものかつはしく

あつかましいとも存じ
おまへさまの折角のお傳へい
佐厚姜さまむなしくいら
さりながらもかつはしく
失礼と相伝いたし申さす
松蔭様で濡れもなさず
せめて一端をいたしました
それ佐深切なく身に志
みそうれしく存じあげ申し
及びはよくねものでございますが
佐様様かしく
お礼のしるしでございます
うしく

月十四日 素山蔵

せうすけ事帰宅いたしました
これハ深切なる事に志
みてうれしく存じあげ申し
万事はよろしくねかいもので ござりますが
法様様もじく
お礼のこゝろで ござい
よろし
うしく

八月十五日　森山蔵

藤居様御内方
法人へ

杉並区和泉町十五

西野晴子様

はるこ

〆

神田区猿楽町二ノ八

東山明子

昭和十四年元旦

市谷田町八十七
春日ふぢ子様
御もとに

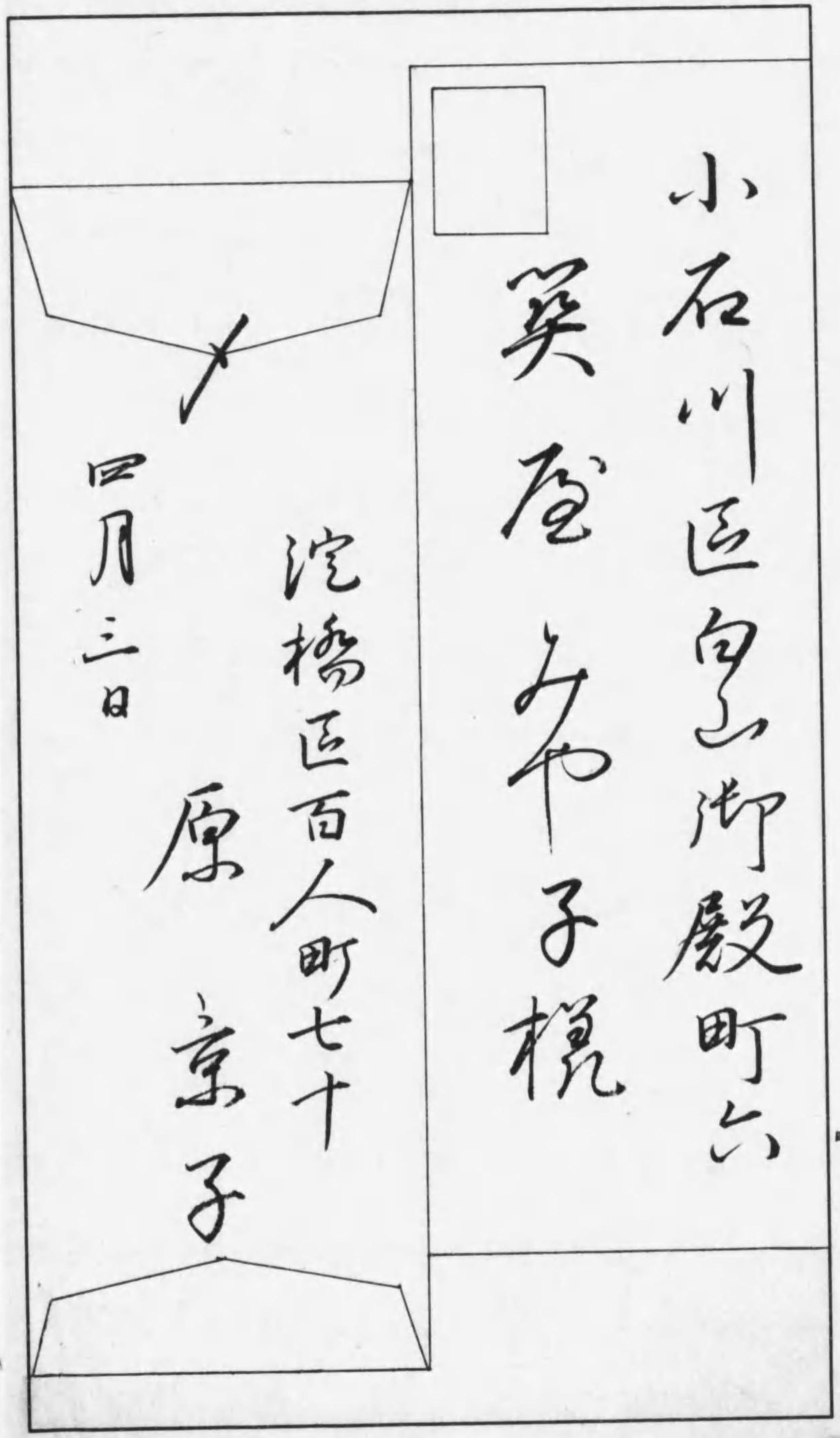
〆
七日

加賀町十三
松原美代子

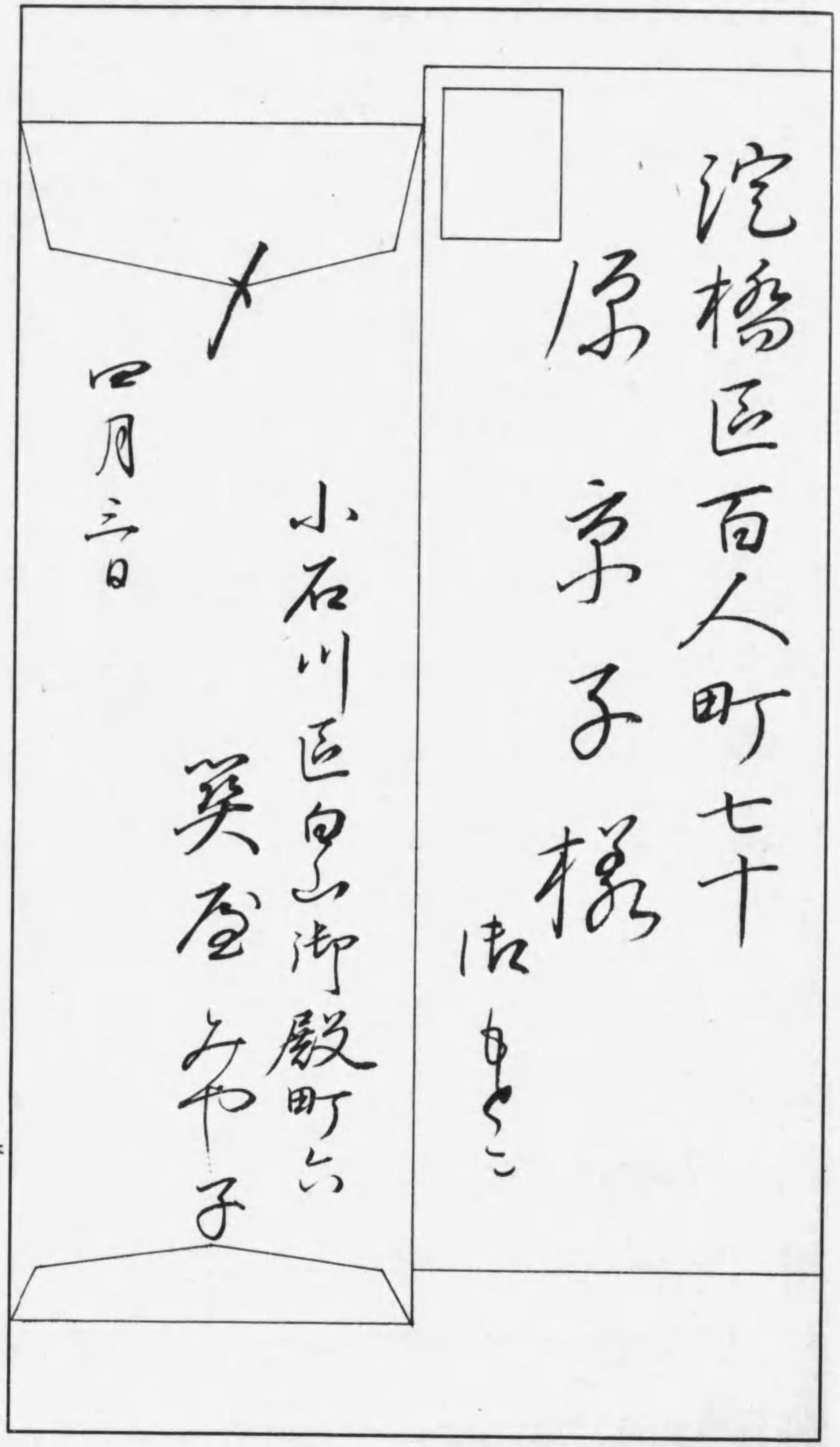
松原美代子様
御かへし

封

春日ふぢ子



小石川区白山御殿町六
英屋みや子様
淀橋区百人町七十
原京子
四月三日



淀橋区百人町七十
原京子様
御もとに
小石川区白山御殿町六
英屋みや子
四月三日

奈良市外西大寺
藤居佑吉様
御内方

水門町二十七
森山茂

八月十四日

〆

一寸申上げまゐらせ候　先日はお頼ひ申しまし
た仕立物もうお届けいたゞき
殊と時日も短かゝりしによほど
たゞのお仕立でもござりましたのと
御案じまゐらせて居りまゐらせ候　誠に結構が
申しうらざいよのすが御様子お知らせ

さい　多分明朝ぐらゐにはなにとかいそいで
けさおそくとも参じてこの手紙ざう
まを申した　　　　あらあら

十月九日　　　　山上内

尾形様

御内

御頼まれお仕立もの只今長女に持參い
たさせましてございますよろしくお願
ひ申上げ候　お約束の日がさしのびまし
たのでどのやうにお差支遅でございましたこと
いらくいしておりましたなく昨夕お手紙
をいただきましてまあ何とおわびも申上

げてよろしいやら　なれ様日記のとゞき
ふしかよおり文ゟいましもうしまいらせ候
五月末二男ゞ發熱しおまへて様子をとほ
しその看病つひおもゝね遅延をいたし
申上しくござ候へ何卒いくつも御ゆる
しのほどを願ひあげまいらせ候　何とぞこれとも

おゆるしくゆうと御ひつかけかた
やう願じあげまいらせ候　かしこ

十日　尾形より

山上様御奥様
御前に

拝啓　丸万商店主細野義太郎氏を
御紹介申上げます　同氏とは数年来の
取引をいたしてをりますがその豊富の優
ある商才は申すまでもなく取引の事務
の敏活な點で十分信用出来るもので
ござります　何卒御引立の程をお願ひ

申上げます
尚同氏ハ昭和二年東京商大の出身であられ
実務に從事せられてゐる紳商でござります
十月二十八日　前田榮雄
濱沼信藏様
侍史

参りましたは留守なのでげんきに力がおち
そでせうお庭の霧孫まこしもうけくこれを
書きこりを
今日はどこへおいでになりましたの病院でも
お体をつれてお出かけでもよいと気もなり
よほどの一寸はおあらせられさいな
それうちによい気もうと思ひ居りを　松の
病気そら

もうあつりと
よろしいのであち
よ江子

午后一時
あき子様
はりへま

只今かへり参り候ひしに四畳半の
窓に志ろき紙のはさみあるを見いで
いそぎ手にとり見候へばあね様には御手
なつかしき御つゞれは病床のちからづきて
まゐらせしお織しらせ候ひしにお兄に
うれしさ限りなく存じ申候

一週間ほど前よりは良人の従姉妹に当り候
ひとの方へ御つどひしく参りをりまゐらせども
付添ひ致す人物なども候はず候ひしが
今日病園いまだ上野より一日おくれ
には女中も病物をもらせなどするため
つれ参りしに候

ことしく耳なれぬ家をみてまゆひ
し時いつぞやりさびしきはるの志
まゆひなむであて人ありもこれいまは
ありたらばなどかつねことを思ひつゞ
中ゆこみのちは和出来どいままでもあ
まゆじく思ひわすまし御事いつまでも

はるのむまく時はおいりそれなくは うしこ
うなつかしくさひしく よし
またもみや わすれも れし
ちつまくのこし
あき子

月清子様

時下ハめつきりお寒くなりました
た詫はいろいろして存じながら何かと取
紛れそれ様もございませねばよろしいので手紙での
お許しゆるしくださいませ
実は姉儀こと杉本康夫と婚約いたし
のは来月中に式をあげることに定めま

したつきましても私こ一家をもたせ
よろしくあ早速家を探させなければならな
いのでございますが法当りに若務に便利
な三間ばかりの家はございませんかしら
おいそがしい折から何とも申上げかね
ますが手すきの折を見て私をお案内しください

よしておきゝとゞけ願ひあげまゐらせ　かしこ

十二月八日　高林恵

稲津七重様
御もとへ

品川区大崎
二丁目四七三
尾形信親様内
玉ゑ

渋谷区原宿二ノ三〇
山上安之内

山上様御奥様
治人

尾形 亀

京橋区銀座
西二丁目十三
浅沼伸花様
机展

四谷区新宿三ノ五八
前田 葉雄

下谷区上根岸
八十六
伊藤よし子様
御もとに

〆

滝野川区西ヶ原町七
萩原あき子

四谷区内藤町一
稲津七重様
御もとに

〆

熊谷市筑波町
二七一四
高林琴

つゝしんで
新年のおよろこびを
申しあげます

昭和十四年元旦

臺南市花園町三
城田桃子様

仙台市越路町十九
山口雪子

突然ですが斎藤先生八月から何処に
お住ひでせうか いつかの御転居の御通
知も戴いてゐましたが見失ってこ
まってゐますから御存じならば折返
しおしらせください

九月三日

松本市深志堂町三二七
宮島恵子

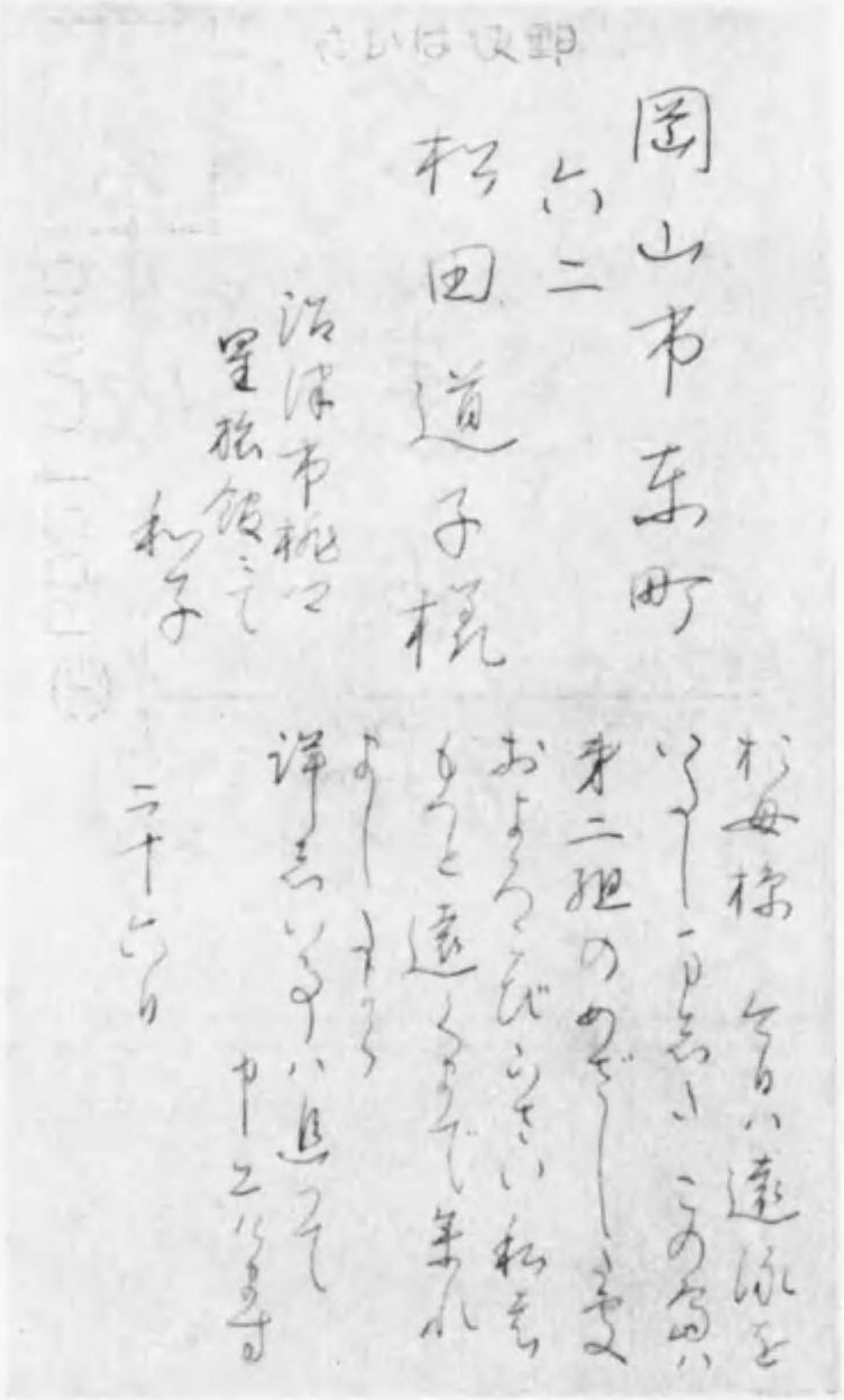
長野市東青沼町
二、三四七
鈴木滝子様

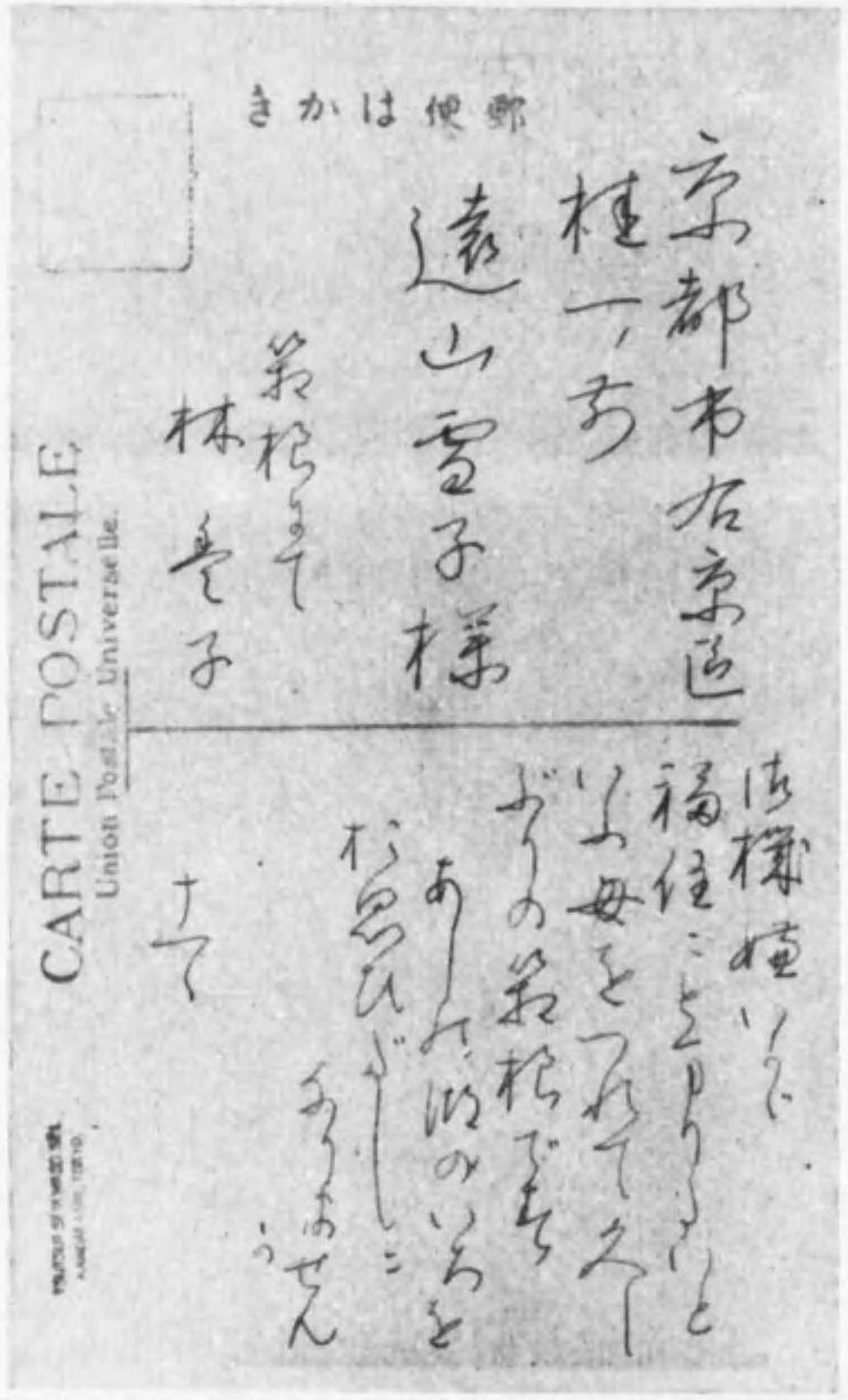
拝復　斎藤先生御住所は
甲府市新柳町十六番地
です
たらうのこ

長野市東吉沼町
鈴木浪子

九月五日

松本市深志堂町
三二八
宮島　素子様


郵便はかき
POST CARD


郵便はかき
CARTE POSTALE
Union Postale Universelle

あさひはおそねとみれあなこ
とふれみるとしくかやまこ
なり

ふるさとのことゝふくとわれらむ
もあらなく
ひよしく
やまの
ひく
しつかり

やまもしひのかみにまかせむ
東京を汽車にてたちより
あつしこ
みる

起首

拝啓　謹啓　粛啓　恭啓
一筆申上げまゐらせ　取急ぎ申上ぐ
一以　幸便に托して申上げまゐらす
拝復　復啓　芳翰拝誦仕候
御文うれしく拝読いたし候
お手紙拝見いたしました

前文

前略　略啓　前省　冠省
前文御免下さい
春　浅春　春暖　暮春
余寒なほきびしく春とは名
のみのさむさ　ゆるく春めい
て梅のみどりも日ごとにいろ増し

百花妍をきそひ　春も漸く
深く　ゆくゑの名残をしく
夏　彩緑　梅天　向暑
炎夜　大暑　青葉の風もこゝち
よく　五月雨日ゝ鬱陶しく
いりつけるやうれ蝉の声も一志

ほあつさを覚えさせ候
秋　初秋　涼氣　冷氣
朝夕を凌ぎよく　月の色もさやか
虫の音もあはれまさり
紅葉そゆるがごとく　燈火親しむ
べき頃となりゆきした

安否

冬　朝寒　霜天　厳冬
極寒　年末　歳晩　いよいよ
おしつまりて年内も餘日なく
師走のさむさ、さてさて極寒でござ
いますれ
いづれも様変りなく御ようすでござそうい

ようす　皆様にはお揃ひ御機嫌よく
なるし　遊ばされ何よりとお喜び
申上ぐ　そのほどおさわりなくて
いろいろしや　いよいよお伺ひ申上げたけれ
貴下益は健勝賀し奉り候
御社益は發展大慶至極に奉存

轉語来文

私方一同無事にて暮しをり候間
憚りながら御休神下されたく
お蔭様で[illegible]して
まづ〳〵御あんしんください
陳者さて　能ながら
右用事のみ　右御挨拶まで

先は御案内まで申上まいらせ候　御礼
うるはしく御報知まで如彩こそ候へ
とりいそぎ御返事まで申し
御普請中のお詫びながら御伺ひ
のみ申上まいらせ候
くれ〴〵も御自愛の程祈り上まいらせ候

結語　敬具　頓首　草々　不一　敬白
あらあらかしこ　御きげんよう

副文　追伸　再申　二申　追啓
なほなほ　かさねて　追って

敬語　様　殿　先生　[illegible]　各位　御中
貴答　芳美　佳　清　鑒

脇付　貴下　執事　侍史　玉机下
玉案下　御もとに　みもとへ
急用　平信　親展　直披　至急
要用　貴酬　御返事　在中

封緘　〆　封　緘

書翰文の書式

一、巻紙の書式

封書といへば、巻紙に毛筆で書いて縦長の封筒に入れるのが普通です。

巻紙は純白で墨つきのよいのを正式とし、儀式用には奉書半切を用ひる事もあります。

前後のあきは、前は片手の巾ほど、後はそれより稍狭い位でよろしく、天地のあきは天一字位、地稍狭い位といふ程度が普通です。行間は文字の大小によつても違ひますが大體半行位か稍廣めでよろしく、すべて見た所餘り廣すぎたりこせついたりの感のないやうに氣を付けたいものです。

日附は、本文より一字程下げ、一行位離して小さめに書きます。署名は、その眞下に餘り上り下りのないやうに、中程から下に書きます。宛名は署名から一行半程離し、日附より少し上から大きめにかきます。脇付は敬稱の左下に小さめにかきます。追書のある時はもう二行程はなして二字位下げ小書にします。

御貴尊等の敬語はなるべく行頭において行尾にならぬやう、候は行頭にならぬやう、先方及その關係者の姓名は行頭におき、當方のは行頭にならぬやう等の注意がいります。

文字は行書と平假名、普通文には普通にかくのが無難ですが大小墨繼等には工夫がいります。

二、書簡箋の書式

罫線のあるものはいふ事はありませんが、無いものでもあるものとして、前後天地行間のあき等に注意すればよろしい。繪のあるものは繪によつて工夫がいります。

三、封筒の書式

和封筒は普通の大きさで無地のものがよろしい。餘り小さいのや繪のごた〳〵してゐるのはよくありません。肩書は丁寧に右上から少し下げて書きます。宛名は肩書より一字程下げて、餘白の中央にかき、脇付は樣子により、内容により付けます。切手は左肩の所に正しく貼ります。裏は表より稍小さめにかきます、日附は左上部餘白にかき、封緘をします。

洋封筒は横に使ふものを縦に使ふのですから、封じ方など日本風にして、書式は和封筒に準じてかくのですが、餘白が多いので工夫がいります。

四、はがきの書式

官製、私製、往復、封緘何れも實用向ですから普通にかきます。偏らぬやうに注意します。日附は本文の終に書くのがよく、署名は都合によつて裏でもよろしいのです。繪葉書は繪との調和を大事にします。

（終）

402
126

昭和十五年七月十五日印刷
昭和十五年七月三十日發行

（奉仕
普及版）

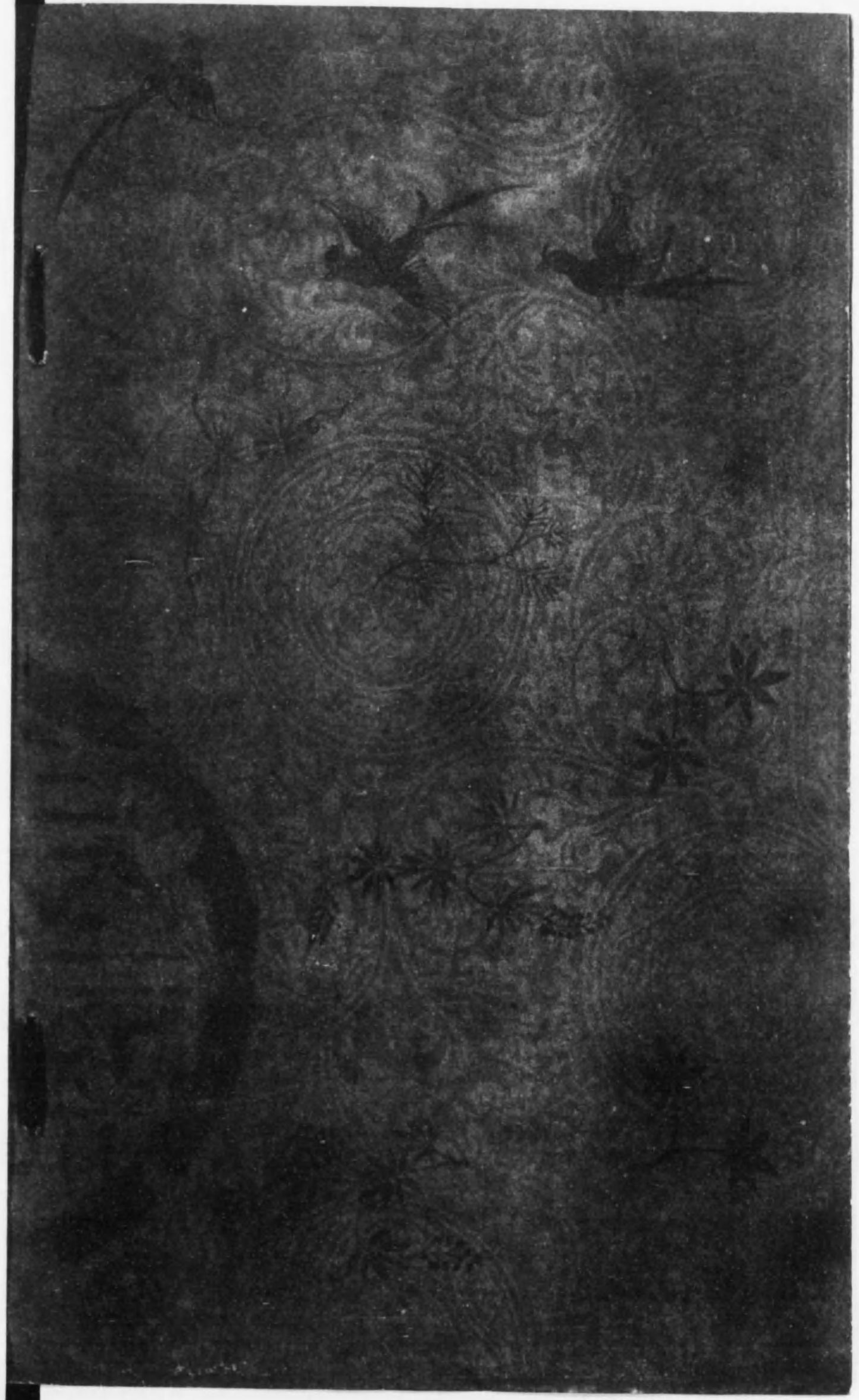
書道實習講座
第十四回配本
書翰書式帖
雜誌「國民書道」共
金六十錢

版權所有 60.2600

著作者 松本直
東京市神田區猿樂町二ノ八
發行者 志水松太郎
東京市神田區神保町一ノ五二
印刷者 志水松太郎
東京市神田區神保町一ノ五二
印刷所 大日本出版社印刷部

東京市神田區猿樂町二ノ八
發行所 大日本出版社峯文莊
電話神田(25)二三九三番
振替東京二三一三四番

頒布所 大日本國民書道會

大賣捌
東京 栗田書店　大阪 柳原書店
東京 東京堂　大阪 盛文館
東京 東海堂　大阪 福音社
東京 北隆館　名古屋 星野書店
東京 大東館　九州 金文堂
東京 大阪屋號　九州 大坪惇信堂

終